

関係先各位

広報資料 **第五回織田作まつり 開催のご案内 vr.1**



「織田作が／を愛した男たち」  
川島雄三生誕百年  
藤本義一 七回忌



左から川島雄三・織田作之助、松竹下加茂撮影所で

2013年の織田作之助生誕百年には多くの関連イベントが開催され、書籍・雑誌も発行されました。生國魂神社境内にも織田作之助の銅像が建立されました。

その翌年、2014年から始まった織田作まつりも、今年、おかげさまで、5回目を数えることとなりました。

去年は、織田作之助の「五代友厚」を取り上げました。五代友厚を映画化しようという動きも活発で、いよいよ作品が具体化しつつあります。

そんな中で、近年、漫画「文豪ストレイドッグス」の登場人物として、織田作之助のファンが若い層にも広がり、6月の大阪府立中之島図書館での「甦る織田作之助」展でも若い女性の姿が目立ちました。訊けば、織田作との縁は、まずゲームから始まり漫画から小説へと興味の対象が次第に拡がって行ったそうです。さて、文豪ストレイドッグスと与謝野晶子記念館のコラボキャンペーン第3弾として、さかい利晶の杜の企画展「堺のオダサク」が2月から4月にかけて開催され入場者で賑わったのは記憶に新しいところです。今さらではありますが、まさに漫画の力を思い知らされました。

さて今年も、織田作之助とゆかりが深い映画監督川島雄三の生誕百年と作家藤本義一の七回忌をメインテーマに、

- ・金秀吉氏の記念講演
- ・落語2題を お送りいたします。

第1部では、「幕末太陽傳」で脚本に参加し、助監督もつとめた今村昌平から横浜放送映画学院（現・日本映画大学）で指導を受けた金秀吉氏に語っていただきます。

第2部はオダサク寄席。昨年まで、進行上やや窮屈だったため、今年は落語2題をたっぷり。

寄席のトップを務める露の眞（まこと）さんは、露の都の2番弟子。今年6月、第4回上方落語2018 若手噺家グランプリで決勝戦進出を果たしました。勢いを得て織田作まつり2回目出演の今回は「元犬」でお機嫌を伺います。

代わって同じく織田作まつり2回目の桂文太師匠が「居残り佐平次」を高座にかけます。去年の織田作まつりでは、「松島心中」を口演していただいたが、これは「品川心中」の大阪バージョン。全く違和感がなく、舞台を品川から松島に移しているので感心しました。映画「幕末太陽傳」(1957年)はこれと今回の「居残り佐平次」のほか、「お見立て」など複数の古典落語のストーリーが巧みに組み込まれています。川島監督にとっても、主演のフランキー堺にとっても、ベスト・ワンと言える傑作。さて、文太師匠がいかにこの江戸落語を上方の土地になじませているか、聞きどころです。

「織田作まつり」が、初回から回を重ね、今年も開催できることは何よりの喜びでございます。これもひとえに多くの方々のご協力をいただいているおかげです。今後も、毎年10月、織田作之助の誕生日の前後に開催してまいりたいと願っております。織田作之助というまたとないコンテンツを享受し、上方文化・芸能の発展に貢献できるよう、皆様のさらなるご支援、ご協力をたまわりますようお願い申し上げます。

オダサク倶楽部 代表 井村身恒

## 記

1. イベント名称 第5回織田作まつり

2. 日時 2018年10月21日(日) 午前11時30分から午後5時前まで

3. 会場 生國魂(いくたま)神社境内

(1) オープニング・セレモニー 北門西側 織田作之助銅像前 {公開プログラム}

(2) オダサク・マルシェ 特設テント {公開プログラム}

(3) 記念講演会・オダサク寄席 社務所2階・和室 {有料プログラム}

生國魂神社へは、近鉄「大阪上本町」駅 西へ徒歩5分

地下鉄谷町線・千日前線「谷町九丁目」駅3番出口より徒歩3分

4. イベント内容

(1) 公開プログラム

■ 午前11時30分より オダサク・マルシェ

会場・織田作之助銅像前 特設テント

● 織田作之助に関連する食品

● 織田作之助に関連した書籍、落語関係書籍などを販売します。

※オダサク・マルシェは商品がなくなり次第終了

■ 午後1時より オープニングセレモニー

織田作之助銅像前にて神事

2013年、織田作之助生誕百年を記念して建立された織田作之助銅像前にて、105回目の誕生日を祝い、

大阪の文化・上方芸能の発展を祈念する神事を行ないます。

(2) 有料プログラム

■ 午後2時より 記念講演・オダサク寄席 (有料・社務所2階にて上演)

あいさつ/聞き手 オダサク倶楽部 代表 井村 身恒

◆ 第1部 記念講演「『還って来た男』から『貸間あり』へ -可能性の映画」

語り手: 金秀吉(キム・スギル) 聞き手: 井村 身恒

—中入り—

◆ 第2部 オダサク寄席

あいさつ 天満天神繁昌亭支配人/オダサク倶楽部顧問 恩田雅和 (企画意図)

露の眞(まこと) 「元犬」 (落語)

桂文太 「居残り佐平次」 (落語)

☆クロージング・トーク

5. 有料プログラム入場料

(1) 一般入場料(第1部・第2部通し) ・前売り券 @2,000円 当日券 @2,500円

(2) 協力券 @5,000円 (第1部・第2部通し券×2枚 + 出演者のサイン(色紙)付)

(3) 団体協力券 @10,000円 (第1部・第2部通し券×5枚付)

6. 主催 オダサク倶楽部

7. 共催・協力 なにわ名物開発研究会 隆祥館書店 + b(プラスバー) ガゼボ~Gazebo~

8. 後援 生國魂神社

9. 企画 恩田 雅和(天満天神繁昌亭支配人/オダサク倶楽部顧問)

10. お問い合わせ先 オダサク倶楽部 代表・井村身恒 TEL&FAX 072-236-6465

[https://www.facebook.com/OdaSakunosuke?ref\\_type=bookmark](https://www.facebook.com/OdaSakunosuke?ref_type=bookmark)

生國魂神社 TEL 06-6771-0002

☆記念講演・オダサク寄席 出演者・企画者・関係者プロフィール

◆金 秀吉

1961年大阪市生まれ。大阪芸術大学短期大学部メディア・芸術学科特任教授。大阪芸術大学芸術学部映像学科兼任教授。横浜放送映画学院在学中の1981年、18歳の時に書いた「潤(ユン)の街」で、映画界の芥川賞と言われる脚本登竜門の城戸賞を史上最年少受賞。以後、22歳のプロデビュー脚本となった「湾岸道路」や、住井すえ原作「橋のない川」など東陽一作品の脚本を手がけ、戦前・戦後に限らず、異例の23歳の若さで、35ミリフィルム撮影による劇場公開映画の初監督。初監督作は「君は裸足の神を見たか」。「潤の街」「あーす」「橋のない川」は、各上映年度、文化庁優秀映画作品賞受賞作である。2013年5月から6月にかけて、大阪松竹座と東京新橋演舞場で公演の音楽劇「ザ・オダサク」の脚本を担当。2014年4月・5月に横浜神奈川芸術大ホールと京都南座にて再演されている。

◆桂文太

1952年、京都市生まれ。1971年三代目桂小文枝(後の五代目文枝)に入門、4番弟子。1987年第1回NHK新人演芸コンクール最優秀賞ほか。田辺寄席には1974年の第1回より出演。昨年は織田作之助の盟友 映画監督川島雄三の代表作「幕末太陽傳」の元ネタとなった落語「品川心中」の大阪版「松島心中」。続いて今年は「居残り佐平次」。難病のため50歳のころから失明し、移動の時は盲導犬をともとしているが、精力的に多くの東京落語の上方への移し替えを手掛ける。持ちネタの数が豊富で詳しく、繁昌亭出演のおりも毎日ネタをかえる。ハメものに使う三味線・太鼓・笛などの演奏技術も高く精通している。織田作まつり2回目の出演。

◆露の眞(まこと)

1986年、三重県志摩市生まれ。2008年露の都に入門、2番弟子。2018年、新進落語家競演会にて審査員特別賞を受賞。今年6月、第4回上方落語2018 若手噺家グランプリで決勝戦進出を果たす。特技はどじょうすくい踊り(師範資格取得)。織田作まつり2回目の出演。

◇恩田 雅和(天満天神繁昌亭支配人、オダサク倶楽部顧問)

1949年、新潟市生まれ。大阪大学大学院文学研究科修了。元和歌山放送プロデューサー。著書に『落語ジャーナリズム』(有馬書店)、『紀伊半島近代文学事典』(共著・和泉書院)など。産経新聞で隔月第1月曜朝刊掲載の「繁昌亭支配人の落語×文学」、今年5月、5年4カ月にわたる連載が完結。第2回織田作まつりでの講演に続いて、第3回織田作まつりから企画。

■織田作之助

1913年(大正2)10月26日、大阪市天王寺区生玉前町に生まれ、その後上汐の長屋で育つ。大阪市立東平野高等尋常小学校(現・生魂小学校)、大阪府立高津中学校(現・高津高等学校)から第三高等学校(現・京都大学)へ。生まれ育った上町、夕陽丘、そして生玉界限など、大阪の風景が数多くの作品に登場する。代表作「夫婦善哉」「青春の逆説」「わが町」「木の都」「六白金星」「アド・バルーン」「土曜婦人」「西鶴新論」「可能性の文学」ほか。1947年(昭和22)、十日えびすの夜、東京で肺結核の出血により死去。天王寺区城南寺町、高津中学同級生であった田尻玄龍師が住職を務めた楞嚴寺に眠る。命日の1月10日は「善哉忌」として、毎年、同寺で法要が執り行われる

■川島雄三

1918年、青森県下北郡田名町(現在のむつ市)生まれ。明治大学卒業後、松竹大船撮影所に入社。織田作之助と交わり、その原作・脚本で第一回監督作『還って来た男』を1944年に撮る。織田作原作は他に「わが町」(1956年)も。日活・東宝系・大映と場を移し、筋萎縮症の宿痾を抱えながら日本軽佻派を名乗り、独自の喜劇・風俗映画・文芸ものと、幅広いジャンルにわたった。その作風は軽妙で都会的、風俗描写に流れることなく、人間観察も深みを加え、陰影ある作品を残した。1963年、肺性心で急逝。45年の短い生涯に51作品を残した。

■藤本義一

1933年、大阪府堺市生まれ。浪速大学(現大阪府立大学)経済学部在学中から、多くの懸賞脚本に入選。在学中の「つばくろの歌」で芸術祭文部大臣賞受賞。卒業後、宝塚映画(東宝系)に入社し、川島雄三に師事し、シナリオの腕を磨き、「暖簾」などの作品も手伝った。川島雄三監督作品では、「貸間あり」(1959年)で川島と共作者となった。ほか、駅前シリーズ、悪名シリーズなど多くの脚本を手がけたのち独立、小説家に転じた。作品に直木賞受賞の「鬼の詩」、織田作之助を扱い日本文芸大賞受賞の「螢の宿」、川島雄三を扱った「生きいそぎの記」ほか多数。1965年から始めたテレビ番組「11PM」の司会は25年にわたり知名度を高めた。2012年、中皮腫のため、79歳でその多彩な活動にピリオドを打った。